

全学共通初年次必修科目としての 情報リテラシー演習授業改善の取り組みと分析

阿部 一晴[†] 酒井 浩二[†] 研 良平[‡]

京都光華女子大学 キャリア形成学部[†] 株式会社ワークアカデミー[‡]

1. はじめに

本学では、2014 年度大学教育再生加速プログラム (AP) の採択を受け、学習・学修マネジメント力を向上させる学習支援体制の構築に取り組んでいる。その対象領域である初年次必修科目の一つとして情報リテラシー演習授業の改善も試みている。PC の操作経験が少なかったり、苦手であったりする学生も増えているという最近の入学学生の状況も考慮し、情報活用力修得を重視しつつ PC 操作スキル修得とのバランスを意識した授業内容を検討・実施し、毎年改善を重ねている。本稿では、AP 取り組みの一つの視点としての「学修成果の可視化」を意識した、全学情報リテラシー科目授業改善の取り組みとその成果や課題等を、成績や受講生アンケート等を組み合わせ分析した結果について報告する。

2. 情報リテラシー演習科目の概要

学生の入学時点でのパソコンや情報に関する知識・興味や技術の個人差は大きく、またすべての学生が社会で求められる情報を実践的に活用する能力の基礎を修得している訳ではない。このため、情報リテラシー科目の授業内容として、学生全体の知識・技術を底上げし、ある程度統一するために、前期「ICT 演習 I」で PC 操作、タイピングと Word, Excel, PowerPoint の基本操作を修得する内容としている。入学時点での学生にレベルの違いがあることから、同一時間割に必ず複数クラスを開講し、内容を初級（基礎的な内容を確実に修得する）と中級（基礎的な内容で退屈しない様に少し高度な内容まで扱う）のクラス分けをおこなう。後期「ICT 演習 II」では、前期に学んだことを基本に、「情報活用力」を段階的に修得する内容としている。

3. 学習成果可視化の試み

本学における AP としての取り組みは、学生の「学習・学修マネジメント力の向上」が目的であり、「自主学習の習慣化」、「支援担当教員による指導」、「学習成果の見える化」、「光華 AL（本学独自のアクティブラーニング指標）の活用」の4つを視点に展開している。本稿で取り上げる情報リテラシー演習科目においても、これらを意識した授業の改善を進めている。特に、本科目は一部の学部・学科を除きほぼ全ての1年生が必修として受講するものであり、対象学生も一定数あり、様々な観点のデータが多く収集出来ることが期待できた。これらの推移や変化等を分析することを通じて、授業内容や方法の改善に加え、AP 取り組み視点の一つである学習成果の可視化の一端に繋げることを試みた。

4. 具体的な収集データと推移

授業に関連するデータとしては、出席や成績といった定量的なもの以外に、受講生のアンケート評価の自由記述なども挙げられる。今回はいくつかの観点から、本学の「ICT 演習 I」（前期）「ICT 演習 II」（後期）の従来の授業内容・方法の改善に着手し AP 取り組みを開始した 2014 年度から 5 年間の推移や変化を示す。

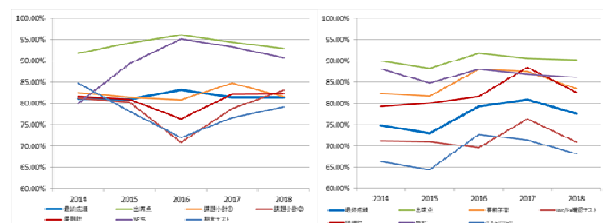


図1：項目別成績の推移（左：前期 右：後期）

図1は、項目別の成績（満点を1とした得点率の全体平均）推移である。この間、成績の評価基準は一定で変更していない。前期と後期では異なる傾向を示している。実技を中心とした演習科目であり、課題（Word・Excelの確認テストを含む）の配点が他の項目より高めに設定されている。その課題点に関して前期は、2016年度のみ悪化している以外は、全体的にほぼ80%前

Practice and analysis of information literacy exercise class improvement as a first-year compulsory subject

[†]Abe Issei / Sakai Koji · Kyoto Koka Women's University

[‡]Togi Ryohei · Work Academy Corporation

後で安定しており、あまり変化は見られない。後期は経年ごとに改善している傾向であるが、2017年度がピークで2018年度に若干悪化している。前期の最終成績も配点比率の高い課題点と同じく全体的に80%強で安定しているが、課題点が悪化した2016年度のみが逆に他年度より良い結果を示している。平常点がこの年度のみ相対的にかなり高いことが要因の様である。後期の最終成績も、やはり課題点と同様の推移で経年で改善している。

5. 受講アンケート結果の推移

次に、受講生のアンケート回答結果についてまとめる。本学では全授業対象に、「主体的な学習取組の状況」「教員の授業姿勢や授業運営」「学習成果」の観点で10の5段階選択式設問と自由記述（任意）からなる授業評価を実施している。これとは別に本科目では受講生対象のアンケートを前期・後期の中間と期末（設問項目は異なる）に実施している。上述した授業評価とは異なる観点で、主に授業運営と受講生自身の理解度（自己評価）を確認する目的で実施している。

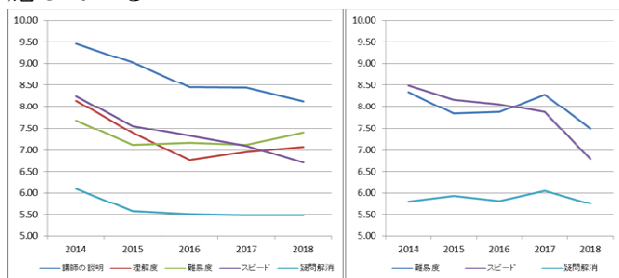


図2：前期受講アンケート結果の推移（左：中間 右：期末）

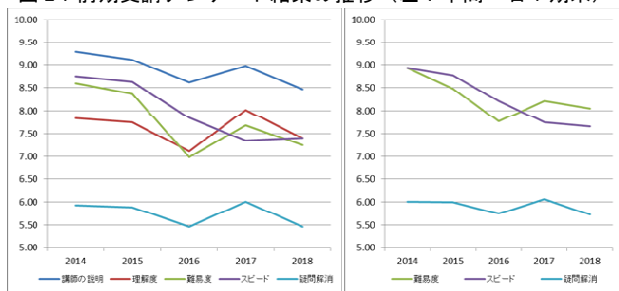


図3：後期受講アンケート結果の推移（左：中間 右：期末）

図2・図3は、前期・後期それぞれの受講アンケート結果の推移である。前期中間については、全体的に経年で評価が低下傾向ではあるが、2016年度以降下げ止まっている。期末についても評価は低下傾向にある。後期についても、年度ごとに評価に多少の差はあるが、中間・期末ともやはり全体的に低下傾向にある。同一年度内の中間→期末の推移を見てみると、各項目とも評価が改善（各年度とも全体で見ると期末の評価の方が中間の評価よりも高い）している。

全体の回答構成では、「授業難易度」は「ちょうど良い」が約60%で最も多いが、「難しい」「やや難しい」が20~30%で増加傾向にある。「授業進行スピード」は「ちょうど良い」が約65%、「速い」「やや速い」が約25%、「遅い」「やや遅い」が10%とほぼ一定で変化がなかったが、2018年度は「速い」「やや速い」という回答が40%を超えている。「授業での疑問解消」は「解決できている」が中間で約80%、期末で約90%とほぼ一定となっている。

6. まとめ

以上述べてきたとおり、情報リテラシー演習科目の授業改善を継続してきた。また、本学のAP取組の一環として、学習成果の可視化も試みた。情報リテラシーのうち技能に関わる部分は、本稿でも述べた実技課題の点数である程度測ることができると考えられる。ただし、かなり大雑把な評価であることは否めない。知識や態度に関しての客観的な評価は更に難しいと感じている。これらを解決する一つの方法として、情報リテラシーを知識・技能の観点別に評価項目を細分化したルーブリックの作成と適用が考えられる。実際にルーブリックの試作も試みた。

知識・技能	中級	評価方法	情報活用能力				
			1	2	3	4	5
情報リテラシー	情報リテラシー	情報リテラシー	1. 情報の収集・整理・評価	2. 情報の活用	3. 情報の発信	4. 情報のセキュリティ	5. 情報の倫理
情報リテラシー	情報リテラシー	情報リテラシー	1. 情報の収集・整理・評価	2. 情報の活用	3. 情報の発信	4. 情報のセキュリティ	5. 情報の倫理
情報リテラシー	情報リテラシー	情報リテラシー	1. 情報の収集・整理・評価	2. 情報の活用	3. 情報の発信	4. 情報のセキュリティ	5. 情報の倫理
情報リテラシー	情報リテラシー	情報リテラシー	1. 情報の収集・整理・評価	2. 情報の活用	3. 情報の発信	4. 情報のセキュリティ	5. 情報の倫理

図4：知識・技能観点別学習成果ルーブリック（一部）

図4がそのルーブリックの一部である。今後、学習内容を網羅したルーブリックを完成させ、受講終了後に全受講生をこれに基づいて評価することで、より精緻な学習成果の可視化に繋がっていきのではないかと考えている。

参考文献

阿部一晴・酒井浩二・藤田大雪. アクティブラーニングを意識した情報リテラシー基礎科目授業運用. (2017). 日本教育工学会研究会報告集 JSET17-4 pp. 129-134. 日本教育工学会
 阿部一晴・酒井浩二・研良平. (2019). 全学情報リテラシー演習科目授業改善効果と課題分析の試み. 2019 PC Conference 論文集 pp. 85-88. コンピュータ利用教育学会
 酒井浩二・阿部一晴・今岡 義明. 4年間の学修成果の関連性分析による定量的可視化. 日本教育工学会研究会報告集 JSET19-5 pp. 233-240. 日本教育工学会